

日本実業史博物館旧蔵資料(一)解題

絵 画 の 部
地 図 の 部
番 付 の 部
竹 森 文 庫

旧蔵者 渋沢青淵記念財団竜門社

旧蔵地 東京都文京区原町一二六

日本実業史博物館の変遷

日本実業史博物館は明治・大正・昭和三代にわたる近代産業経済の指導者、さらには近代日本文化発展の功労者である青淵渋沢栄一の遺徳を顕彰するために計画された博物館であった。

昭和六年十一月十一日渋沢栄一没後、青淵に恩恵を蒙った実業界の人たちが集って渋沢青淵翁記念会(会長郷誠之助)をつくり、青淵の伝記編纂(「渋沢栄一伝記資料」五八巻完結)と、遺徳顕彰の記念事業を始めた。記念事業としてはまず青淵の銅像を常盤橋門外に建て、その頌徳碑を韓国の京城に建立。さらに記念会では渋沢栄一記念室をもつくる予定であったが、渋沢家が固辞したため、その頃、財団法人竜門社が企画してい

た実業博物館の設立に協力して、渋沢青淵翁生誕百年記念事業として翁のかつての住いであった東京都北区西ヶ原の暖依村荘に日本実業史博物館を建設し、その中に青淵翁記念室を設けることとなった。これより先、青淵の没後、暖依村荘の土地・建物並にその他の付属品一切は財団法人竜門社に遺贈されており、博物館は同敷地内の母屋の西北、飛鳥山寄りに鉄筋コンクリート造り地上三階地下一階の延八〇〇坪と内定した。その地鎮祭は、当時の首相平沼騏一郎をはじめ政界財界の有名人をまねいて、昭和十四年五月十三日に挙行された。建築には渋沢家との縁故により清水建設株式会社が当ることとなり、着工を目前にしたが、その秋の建築資財統制のため建築を一時中止せざるを得なくなった。

一方、博物館展示用の資料の蒐集は昭和七年以降、渋沢敬三氏を中心として朋友の土屋喬雄博士、樋畑雪湖氏がこれに加わって開始された。実務には樋畑氏の末子樋畑武夫氏があたることとなり、千代田区丸ノ内の第一銀行本店五階に事務室をおいて、蒐集した資料もここに保管された。この蒐集にあずかったのは甲州文庫功力亀内氏、粹古堂伊藤敬次郎氏、うさぎや書店、木内書店などである。とくに器財の資料蒐集に非凡なる才能を発揮したのが功力氏で、その業績は大であった。昭和十四年初秋、故樋畑雪湖が住友吉左衛門家へ転出するに当って帝室博物館（現国立東京博物館）から遠藤武が招かれ、資料の蒐集・整理・保管とその鑑査にあたった。満洲事変が日中戦争とかわり、さらに太平洋戦争へと発展してからもその蒐集事業は続き、遠藤が直接、資料の蒐集と渉獵に歩いて不足分を補った。昭和十六年七月遠藤の応召後、一時杉本行雄氏（現十和田電鉄株式会社社長、十和田商工会議所会頭）がこれに代わった。昭和十七年三月に渋沢氏が日本銀行副総裁に就任、続いて総裁となる一方第一銀行と三井銀行の合併問題によって、博物館資料の移転問題がおこったため、小石川原町の阪谷芳郎邸を渋沢氏が購入して竜門社に寄贈、その管理経営をゆだねた。そしてここを日本実業史博物館の別館として、暖依村荘に本館が建設されるまで、その準備をととのえることとなった。当時、産業経済界はあらゆる面で統制が続いたが、企業整備で不用となった陳列ケース・呉服台を購入したり、斜面ケースを新調するなど開館のための努力が続けられた。その間にも、戦争は熾烈となり、戦火は日本本土に及び、東京も劫火に見舞われたが、原町の別館は辛うじて戦火をまぬかれた。終戦後、渋沢財閥も他の財閥同様に解体され、また竜門社の資産も凍結され、原町の博物館はアメリカ軍に接収された。渋

沢青淵翁記念会と合併して改称した沢沢青淵記念財団竜門社も、ここに至って当分は博物館を開設する見込みも立たないので、ひとまず文部省史料館に寄託することに決定し、昭和二十六年に資料全部が当館に移された。その後、故沢沢敬三が九州の旅先で病にたおれてから身辺整理がはじまり、昭和三十七年九月に同氏の口添と竜門社理事長植村甲午郎氏の尽力により、これを国家に寄贈することとなり、当館が寄贈を受け、現在に至っている。

資料とその内容

旧蔵資料は、渋沢栄一が誕生した天保十一年（一八四〇）二月十三日から、その死去の昭和六年（一九三二）十一月十一日までの期間を一応の目安として資料蒐集が行われたが、集ったものは元禄時代から昭和十年頃までのものを含んでおり、中では幕末から明治にかけての資料が多い。公家・武家や、庶民でも上流階級の間で使用された美術的調度品などは国立博物館・美術館などに収蔵されているけれども、庶民生活がにじみ出た器財となると、日本実業史博物館の旧蔵品以外にはまとまったものは少ない。いま、旧蔵資料を大別して、

- 絵画の部
- 地図の部
- 番付の部
- 竹森文庫
- 商業器具
- 文書の部
- 書籍の部

広告の部

写真の部

の九種に分類している。このうち絵画の部より竹森文庫までを本目録にとりあげたが、各部の内容・特色を略述すると次の通りである。

絵画の部

絵画といっても大部分が錦絵である。しかもその年代の上限は、名主両印の化政時代からである。元来、錦絵は江戸や東京見物に来た人たちの土産品であり、とくに実業の変遷を物語るためにつくられたものでないから、経済現象を描写したものは至って少ない。作者の立場からすればそれは当然の事であって、時たま何かの観覧手引としてつくられたものや、副次的に描かれたものが、逆にこの方面での貴重な役割をはたすことにもなる。また物価騰貴や為政者を揶揄したような錦絵、文明開化の時期にあたって新旧対照を画材にした錦絵の中には、芸術作品としては大した評価を与えられていないものでも、今日になってみると重要な資料となっているものが多い。本資料の性格上、錦絵の表題だけでは解決されない種類のものが多いので、そこに描かれている内容によって、部類分けを試みることにした。また錦絵は、画のすみに押された極印によって、明治八年までの製作年代が判明し、それ以後は明確な製作年月があるので、およそ刊行年月がわかる。資料利用の上からも年代が明白なのは価値もあり、使用にも便利なので、分類は大別したのみであとは編年に並べた。錦絵の出版は大体明治二十年代までで、それ以後は銅版・石版に押され、写真の普及につれてその姿を没してしまう。作者としては、横浜物に貞秀が多く、江戸から明治にかけての作品には広重・国輝・周延・国利・年一・一景があり、十年代では清親・安治の作品が圧巻である。

地図の部

江戸から昭和までのものが集められているが、その中心はやはり江戸末期から明治時代である。交通・鉾山その他商業都市関係のものには比較的珍しいものが含まれている。

番付の部

優劣勝敗は人の好むところであるが、それが一枚の表として描き出されるところに番付の面白味がある。これは範を相撲にとつたもので、あらゆる社会現象全般にわたって品評し、その結果を見立番付にすることが江戸末期から流行した。その筆頭は丸持長者といわれる金持番付にはじまって、物産・諸職・芸能・輸出入品・栄枯盛衰までとり上げられている。これを一つだけでなく四種類または八種類を一枚にまとめたものが四方一覽であり、八方一覽である。時には、十種以上のものを冊子風にまとめて、江戸自慢などと名付けたものもある。質屋番付、牛乳屋番付、醬油屋番付等は珍品に属するものである。しかし、大体において、古いものには刊行年月のない憾みがあるが、それが番付の特色でもある。また番付ではないが統計・相場関係の摺物も、便宜上この部に挿入した。

竹森文庫

東洋経済新報記者故竹森一則の蒐集にかかる明治時代の政治経済を中心とした書籍であって、法律・外交・軍事・簿記その他をも含めて総計一、五〇〇余点に及んでいる。

石橋湛山氏の、竹森氏についての思い出話によると、竹森氏が東洋経済新報社に入社したのは、大正十一年四月二十五日、氏の三十五歳の時であった。ちょうど、同社で、「ザ・ジャパン・ファイナンシャル・エンド・エコノミック・マンスリー」を発刊するに当って、その編集員として採用したものであった。それまでの氏の経歴については、金沢出身であることと北海道札幌中学中退ということの外は誰も知らない。氏の父は医者であり、北海道移住に際して父に随って札幌に行ったことは確かである。氏は酒仙といわれるだけに学生時代から酒を好み、このため学校も中退、その後は独学で一家をなしたといわれる。とも角、記者時代にもこつこつと保険の研究を行なって新境地を拓き、保険評論界の権威者となった話は有名である。氏は日本文学にも興味をもち、その資料蒐集も多岐にわたり、古書展のあるところ氏の姿のみえないことはなかったという。氏は『本邦生命保険業史』をはじめ『明治大正国勢総覧』、『明治大正財政詳覧』を編集、昭和十一年暮から十八年の夏にかけ

て、東洋経済新報創刊四十周年記念事業として『索引政治経済大年表』二巻の大事業を完成させた。氏の人物は、石橋湛山氏の語るとおり「人間の価値は棺を蓋ふて後定まると云ふが、竹森君の如きは、棺を蓋ふて回顧され、意外に其の価値の大なることに感嘆される珍しい人の一人である」(「東洋経済新報」第二四一〇号 昭和二十五年二月十八日)の一言につきる。昭和二十五年一月十六日疎開先で死去。享年六十三。

氏の蔵書の伝来は、『索引政治経済大年表』が完成した翌年、東京では非常時態勢から人間や物の疎開が始まり、竹森氏も東京都北区田端の住まいから栃木県下に疎開するに際して、その蔵書の一部を故渋沢敬三が購入、同氏がこれを日本実業史博物館へ寄贈したものである。文庫の内容からみると、昭和十五年六月二十一日から二十九日にかけて日本橋三越で開催された、紀元二千六百年記念明治大正昭和経済文化展覧会(東洋経済新報社主催)の陳列文献目録に記載されている明治期のほとんどの書籍が含まれている。

本目録の作成に当り、分類の大綱は日本十進分類法に従ったが、細部においては蔵書の内容によって便宜上の項目を設けて分類した。また、項目内の書名の配列は五十音順によらずに、原則として出版年次による編年順を採った。何れも利用上の便宜を考えたものである。

1380

昭和四十年三月三十日 印刷
昭和四十年三月三十一日 発行

東京都品川区豊町一丁目十六の一〇

編集者 史料館
発行者 史料館

印刷者 東京都中央区入舟町二丁目十一
特急印刷株式会社